教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか（３）

沖林　洋平[*1]・池永真依子[*2]・中川　穂[*3]・藤永　啓吾[*4]

How do teachers think about teaching moral education? (3)

OKIBAYASHI Yohei [*1], IKENAGA Maiko [*2], NAKAGAWA Minori [*3], FUJINAGA Keigo [*4]
（Received JULY 31, 2024）

キーワード：特別の教科　道徳、道徳科の授業イメージ尺度、一般化線形モデル

はじめに

附属学校では、「『特別の教科　道徳』学びの会」（以下、「学びの会」）と題する、教員や一般の教育関係者、教職を志す大学生等を対象にした研究会を継続的に行っている。この研究会では、平成 30 年度から小学校、平成 31 年度から中学校で、教育課程における道徳の時間が「特別の教科」化されることを踏まえて、平成 29 年度より発足した。表 1 に、2021 年度第 14 回以降の開催内容を示した。

2021 年度以降は、学びの会に対する参加者の満足度だけでなく、特別の教科　道徳に関する授業イメージについても調査を行っている。沖林ら（2021；2022；2023）では、学びの会の参加者は、道徳科の授業を「児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって解決する時間である」、「道徳の授業は児童生徒自身が自らの価値を発見する時間である」といった学習者関与的授業イメージをもって授業実践に取り組んでいることが示された。学びの会では、授業実践の方法、評価の在り方、近年では改訂された生徒指導提要の読み方に関する研修が行われており、参加者から高い評価を得ている。

学びの会は、2023 年度は学部の教育科目と連動して開催することで、学部学生の道徳科に対する興味関心を高めること、および、学部学生の教育実習への積極的な参加や教員採用に対する志望動機を高めることを目指した。従来は、道徳科に特化して先進的な教育実践を展開している教員を中心に招聘してきたが、2023 年度は道徳科に限らず、理科や生徒指導に関係する講演を設定したり、県内外で興味深い教材等を開発している一般企業のブースを設置することとした。

参加者に対する研修満足度調査の項目は、従来と同様の項目を用いることとした。また、参加者の属性調査についても従来と同様の項目を用いることとした。本研究の調査においては、本研究の先行研究（沖林ら、2021；2022；2023）を踏襲して、道徳科の授業イメージ、道徳基盤に関するイメージと寛容性をたずねた。先行研究では、道徳科の授業について 1 つの解決が設定されるべきであると考える学習者分離的価値観と道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間であるといったような、学習者関与的価値観をもつ 2 つのクラスタがみられることが指摘されている。本研究においても同様のクラスタがみられるかどうかを検証することで、道徳基盤に関する価値観を類型化することができると考えた。また、例年とは異なり、2023 年度は大学生の割合が高くなることで、それまで現職教員が多くを占めていたものと回答傾向が異なるかどうかを検討することができる。例年とは大きく異なる回答傾向であれば、回答者の属性が学生であるか、現職教員であるかの違いによって道徳の授業に対するイメージが異なることが示唆される。

以上の研究背景に基づき、本研究では、学びの会の参加者に対して、研修満足度と道徳科や道徳基盤に関する意識調査を実施した。

＊1　山口大学教育学部小学校総合選修　＊2　山口大学教育学部附属光小学校　＊3　山口大学教育学部附属山口小学校
＊4　山口県教育庁教育情報化推進室活用推進班（元 山口大学教育学部附属光中学校）

表１　学びの会の 2021 年度以降の開催スケジュールと講演者、講演内容

	日時	場所	講演者	テーマ
第 14 回	2021年 12月4日 （土）	オンライン	藤永啓吾	模擬授業
			白井俊 永田繁雄	シンポジウム
第 15 回	2022年 2月19日 （土）	オンライン	中川穂	実践発表I
			池永真依子	実践発表II
			温品賢二 森重孝介 藤永啓吾	パネルディスカッション
第 16 回	2022年 6月25日 （土）	オンライン	池永真依子 中川穂	教材分析→吟味
			藤永啓吾	問い創り
			森重孝介	板書創り
			久保田高嶺	研修創り
			温品賢二	講演
			温品賢二　他	パネルディスカッション
第 17 回	2022年 11月23日 （土）	山口大学	中川穂	小学校授業体験
			藤永啓吾	中学校授業体験
			山田貞二	特別講演
			山田貞二　他	パネルディスカッション
第 18 回	2023年 2月25日 （土）	セミナー パーク	藤永啓吾	授業づくり最初の一歩
			森重孝介	発問創りI
			中川穂	発問創りII
			藤永啓吾	生徒指導提要のポイント
			藤永啓吾　他	パネルディスカッション
第 19 回	2023年 10月29日 （日）	山口大学	辻健	価値を創る理科&Well Being
			藤永啓吾	プロアクティブ&生徒指導
			新田拓也	ICT & Google
			丸岡慎弥	学級経営&授業技術
			森岡健太	道徳科&番所の極意
第 20 回	2024年 2月24日 （土）	維新ホール 会議室	山平恵太	「なりたい自分になる」子どもを育む道徳科授業
			杉本遼	道徳授業楽しんでいますか
			池永真依子	マネジメント&ファシリテーター
			中川穂	マネジメント&ファシリテーター

２．方法

２－１　調査時期

本研究は、2023 年 10 月に実施された第 19 回学びの会を「学びフェス in 山口大学」と称し、会の終了後に行われた。

２－２　調査対象者

本研究の調査対象者は学びフェス in 山口大学参加者のうち回答が得られた 65 名が調査対象者であった。

２－３　材料

本研究では以下の質問項目を設定した。1. 性別　2. 職務年数　3. 所属校種　4. 専門（1. 道徳、2. 教科、3. 生徒指導、4. マネジメント）　5. 参加回数　6. 学びの会参加に対する意識を尋ねる項目を尋ねた。項目は、これからも参加したい、次の開催を楽しみにしている、同僚に知らせたい、他教科の授業づくりに役立つ、幼小中高を選ばず役立つ、教育相談や生徒指導にも有効だ、法定研修で行われてもよい、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ、最新の教育の話題について知ることができる、であった。回答は 7 件法であった。7. 道徳の授業イメージに関する項目を尋ねた。項目の内容は、表 7 に示す。

２－４　手続き

本研究の調査は会終了後に、参加者に回答用ウェブサイトのアドレスが示され、調査に回答したものはウェブサイトにアクセスして回答した。回答には 5 分程度を要した。

３．結果

属性に関する質問項目の結果を示す。表 2 に性別と学校種のクロス集計表を示す。

表２　性別と学校種のクロス集計表

	女性	男性	回答せず	合計
幼稚園	0	0	0	0
小学校	8	7	0	15
中学校	4	3	0	7
高等学校	0	1	0	1
特別支援学校	0	0	1	1
大学生	27	8	0	35
教職大学院生	0	1	0	1
教育委員会等	0	1	0	1
その他	1	3	0	4
合計	40	24	1	65

表 3 に性別と専門のクロス集計表を示す。

表３　性別と専門のクロス集計表

	女性	男性	回答せず	合計
ICT 関連（プログラミングを含む）	3	4	0	7
マネジメント	1	2	0	3
教科指導	19	11	0	30
特別支援関連	9	0	1	10
生徒指導	7	2	0	9
教育課程編成	0	1	0	1
評価関連（学力，成績評価）	0	3	0	3
防災　異文化間交流	0	1	0	1
その他	1	0	0	1
全体	40	24	1	65

表 4 に学校種とこれまでの学びの会の参加回数のクロス集計表を示す。調査時に初めての参加だったものは、65 名中の 49 名であった。

表４　学校種と参加回数のクロス集計表

	1	2	3	5 回以上
幼稚園	0	0	0	0
小学校	8	1	2	4
中学校	1	3	0	3
高等学校	1	0	0	0
特別支援学校	1	0	0	0
大学生	35	1	0	0
教職大学院生	1	0	0	0
教育委員会等その他	2	1	0	1
合計	49	6	2	8

表 5 に学校種と職務年数のクロス集計表を示す。20 年以上という回答をしたものが 8 名であった。

表５　学校種と職務年数カテゴリのクロス集計表

勤務年数カテゴリ	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	大学生	教職大学院生	教育委員会等	特別支援学校
0 年	0	0	0	0	33	0	2	0
10 年未満	0	3	3	0	1	0	0	1
20 年未満	0	6	3	1	0	1	2	0
20 年以上	0	6	1	0	1	0	1	0
合計	0	15	7	1	35	1	5	1

表 6 に学びの会に対する意識に関する質問項目の回答についての平均値、標準偏差、中央値を示す。得られた要約統計量は男女別に示している。

表６　意識に関する質問項目の平均値、標準偏差

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q2-1 学びの会にはこれからも参加したいと思う	女性	5.95	0.99	6
	男性	6	0.88	6
Q2-2 学びの会の次の開催を楽しみにしている。	女性	5.88	1.04	6
	男性	5.96	1	6
Q2-3 学びの会のことについて同僚に知らせたい	女性	5.92	1.19	6
	男性	6	0.83	6
Q2-4 学びの会の内容は道徳以外の教科の授業づくりに役立つ	女性	6.5	0.82	7
	男性	6.13	0.9	6
Q2-5 学びの会の内容は幼小中を選ばず役立つ	女性	5.9	1.26	6
	男性	5.75	1.22	6
Q2-6 学びの会の内容は教育相談や生徒指導にも有効だ	女性	6.47	0.85	7
	男性	6.17	0.87	6
Q2-7 学びの会の内容は「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ	女性	5.88	1.56	7
	男性	5.75	1.15	6

表 7 に、道徳の授業のイメージについて尋ねた項目の回答の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表７　男女別の道徳の授業イメージの平均値、標準偏差、中央値

項目	性別	平均値	標準偏差	中央値
Q3-1 道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である	女性	5.22	0.83	5
	男性	5.33	0.76	5.5
Q3-2 道徳の授業は児童生徒自身の問題を仮説検証や試行錯誤によって授業の課題を解決する時間である	女性	4.67	1.02	5
	男性	4.58	1.18	5
Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である	女性	2.92	1.25	3
	男性	3.25	1.19	3
Q3-4 道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である	女性	4.9	0.98	5
	男性	5	1.02	5
Q3-5 他教科で学んだことを道徳の授業に生かす時間である	女性	4.33	0.94	4
	男性	4.75	0.9	5
Q3-6 道徳の授業で扱う内容にはそれぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う	女性	2.1	1.46	1.5
	男性	2.13	1.3	2
Q3-7 授業で取り上げる道徳的価値は児童生徒の生き方の自覚とは関係ない場合もある	女性	2.77	1.48	3
	男性	3.21	1.69	3

表８に道徳の授業イメージに関する項目の相関係数を示した。

表８　道徳の授業イメージの相関係数

	Q3-1	Q3-2	Q3-3	Q3-4	Q3-5	Q3-6	Q3-7
Q3-1	—						
Q3-2	0.37 **	—					
Q3-3	-0.19	0.25 *	—				
Q3-4	0.42 ***	0.43 ***	0.03	—			
Q3-5	0.08	0.19	0.28 *	0.37 **	—		
Q3-6	-0.21	0.14	0.54 ***	-0.1	0.21	—	
Q3-7	-0.06	0.24	0.29 *	-0.13	0.3 *	0.3 *	—

Note. * p < .05、** p < .01、*** p < .001

道徳授業イメージの得点を従属変数として回答者を分類するために、クラスタ分析を行った。Distance measure は euclidean、Clustering method は ward.D2 であった。デンドログラムを確認した結果、2 クラスタが妥当であると判断した。

得られたクラスタの特徴を確認するために、道徳授業イメージを実験参加者内要因(7)×クラスタを実験参加者間要因(2)とする 2 要因分散分析を行った。その結果道徳授業イメージの主効果（$F(6、372) = 34.47$、$p < .001$、$\eta^2 = 0.35$)、クラスタの主効果（$F(1、62) = 10.16$、$p < .01$、$\eta^2 = 0.14$)、2 要因の交互作用（$F(6、372) = 19.27$、$p < .001$、$\eta^2 = 0.24$）が有意であった。

多重比較を行った結果、「道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」（$t(62) = 4.83$、$p < .001$)、「道徳の授業で扱う内容にはそれぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う」（$t(62) = 8.84$、$p < .001$）でクラスタ 2 がクラスタ 1 よりも有意に高かった。なお、「道徳の授業は児童生徒が自らの価値を発見する時間である」、「道徳の授業でも情報モラルや LGBT の理解などの現代の社会的問題の理解を深めることができる時間である」もクラスタ 1 がクラスタ 2 よりも高い値を示した。

沖林ら（2021）では、同様の項目を因子分析によって 2 つの因子を構成し、因子ごとの得点の違いを検討した。本研究でも同様の傾向が見られたため､道徳授業イメージに関する項目を「学習者関与的授業」イメージと「学習者分離的授業」イメージの 2 つの要因に分けて分析を行った。なお､「学習者関与的授業」イメージには、Q3-1、Q3-2、Q3-4、Q3-5 として、「学習者分離的授業」イメージは、Q3-3、Q3-6、Q3-7 とした。

道徳の授業に対する「学習者分離的授業」イメージ因子と道徳の授業に対する「学習者関与的授業」イメージについて、それぞれの平均値と標準偏差、因子間の相関係数を算出し、表 9 に示した。

表９　道徳の授業イメージの因子別の平均値、標準偏差、中央値

	平均値	標準偏差	中央値
「学習者関与的授業」イメージ	4.83	0.67	4.75
「学習者分離的授業」イメージ	2.70	1.06	2.67

表 10 に、道徳の授業イメージの因子について、男女別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 10　道徳の授業イメージの男女別の平均値、標準偏差、中央値

		平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	女性	4.78	0.67	4.75
	男性	4.92	0.67	4.88
「学習者関与的授業」イメージ	女性	2.6	1.08	2.33
	男性	2.86	1.04	2.67

表 11 に道徳の授業イメージの因子について、職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値を示す。

表 11　道徳の授業イメージの職務年数カテゴリ別の平均値、標準偏差、中央値

	職務年数カテゴリ	平均値	標準偏差	中央値
「学習者分離的授業」イメージ	0 年	4.8	0.55	4.75
	10 年未満	4.79	0.74	4.5
	20 年未満	4.75	0.87	4.75
	20 年以上	5.11	0.74	5
「学習者関与的授業」イメージ	0 年	2.92	1.09	3
	10 年未満	2.95	1.41	2.67
	20 年未満	2.26	0.78	2.33
	20 年以上	2.26	0.81	2.33

表 12 に道徳の授業イメージの因子間相関を示した。図 1 に道徳の授業イメージの因子間の散布図を示す。

表 12　道徳の授業イメージの因子間の相関係数む

		a	b
「学習者分離的授業」イメージ	a	—	
「学習者関与的授業」イメージ	b	0.14	—

Note. * p < .05、** p < .01、*** p < .001

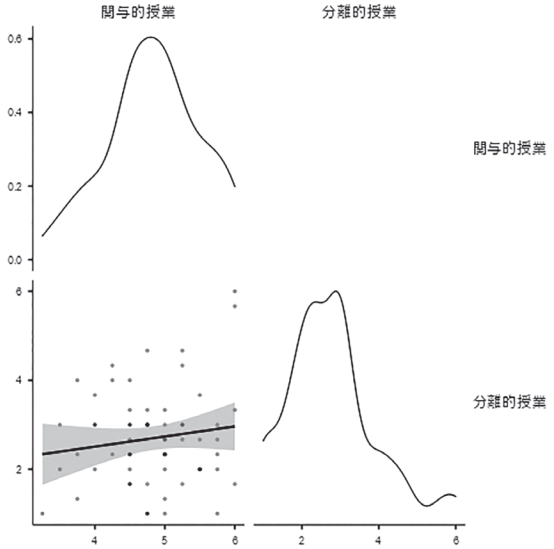

図 1　学習者関与的授業と学習者分離的授業イメージの散布図

2 因子間の相関係数は $r = 0.14$ と有意な相関は得られなかった。

道徳授業イメージの 2 機能を参加者内要因（2）、クラスタ（2）を参加者間要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、2 要因の交互作用が有意であった（$F(1, 62) = 71.58$、$p < .001$、$\eta^2 p = 0.54$）。下位検定の結果、「学習者分離的授業」イメージにおいてクラスタ 2 がクラスタ I よりも有意に高かった（$t(62) = 7.39$、$p < .001$）。図 2 に各クラスタにおける授業イメージを示す。

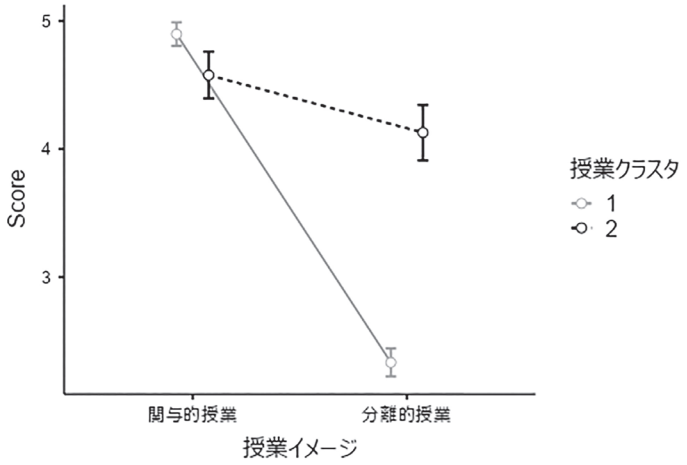

図 2　各クラスタにおける学習者関与的授業と学習者分離的授業の平均値（エラーバーは標準誤差）

学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討するために、学習者関与的授業を従属変数とする回帰分析を行った。回帰分析の結果を表 13 に示す。Q3-5「他教科で学んだことを道徳科の授業に生かす時間である」は不適であったため除外した。学習者関与的授業に影響を及ぼすのは、Q3-1、Q3-2、Q3-4 であった。これら 3 項目のうち交互作用が見られた組み合わせはなかった。

表 13　学習者関与的授業と道徳科の授業イメージの回帰分析

						95%信頼区間	
説明変数	推定値	標準誤差	*t*	*p*	標準化推定値	下限	上限
Q3-1 価値	0.25	0.04	6.49	<.001	0.3	0.21	0.4
Q3-2 試行錯誤	0.22	0.03	7.21	<.001	0.35	0.25	0.45
Q3-3 教科書	0.03	0.03	1.15	0.254	0.06	-0.04	0.15
Q3-4 社会的問題	0.36	0.03	11.63	<.001	0.54	0.45	0.64
Q3-5 他教科	-	-	-	-	-	-	-
Q3-6 唯一の答え	0.02	0.02	0.73	0.469	0.03	-0.06	0.13
Q3-7 生き方無関係	0.05	0.02	2.64	0.011	0.11	0.03	0.2

学習者関与的授業イメージを従属変数、「Q3-3 道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」、「Q3-6　道徳科の授業で扱う内容には、それぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う」を共変量とする一般化線形モデルによる分析を行った（AIC = 130.93、χ^2 = 0.41）。共変量による影響を表 14 に示す。また学習者関与的授業を従属変数として、「Q3-6　道徳科の授業で扱う内容には、それぞれの授業で唯一の正しい答えがあると思う」の影響における「Q3-3　道徳の授業の時間では教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」の調整効果を図 3 と表 14 に示す。

単純効果検定の結果、Q3-6 の -1SD は有意であり（β = -0.31、SE = 0.14、p < .025）、+1SD で有意でなかった（β = -0.02、SE = 0.07、p = 0.764）。図 3 においても、学習者関与的授業を Q3-4 の -1SD が +1SD よりも有意に促進している。

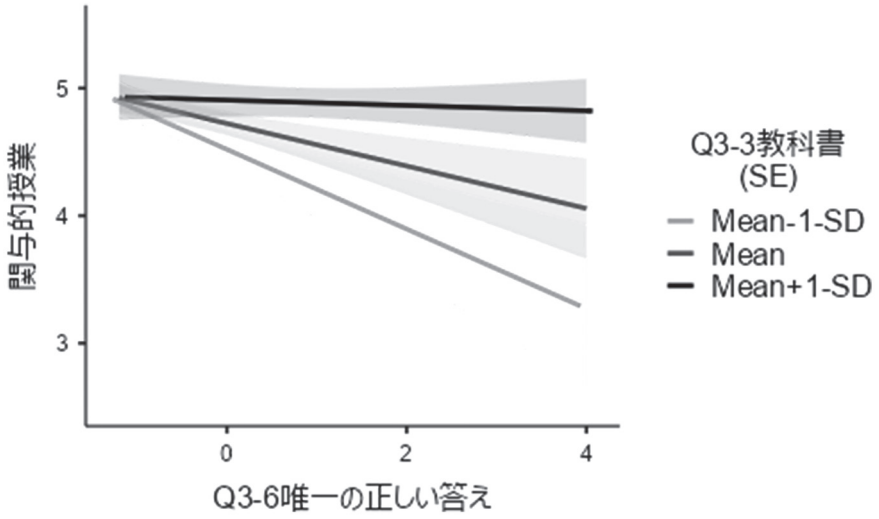

図３　学習者関与的授業イメージに及ぼす「Q3-6 唯一の正しい答えがあると思う」の影響における「Q3-3 教科書や教材の内容を正しく伝えることが最も重要である」の調整効果

表 14　学習者関与的授業イメージに影響を及ぼす授業イメージクラスタにおける「教科書を重視」意識の調整効果

				95% Exp(B) 信頼区間			
	推定値	SE	exp(B)	下限	上限	*z*	*p*
(Intercept)	4.72	0.09	112.52	93.84	134.92	50.99	<.001
Q3-3	-0.17	0.09	0.85	0.71	1.01	-1.87	0.066
Q3-6	0.15	0.08	1.16	0.99	1.36	1.84	0.071
Q3-3＊ Q3-6	0.12	0.05	1.13	1.02	1.24	2.36	0.021

４．考察

本研究では、特別の教科　道徳「学びの会」の参加者に対する調査を行い、学びの会に対する意識や満足度の調査を行った。調査の結果、以下のことが明らかとなった。これまでの先行研究における調査（沖林ら、2020；2021；2022）でも示されたように、参加者の学びの会に対する高い参加意識や満足感が示された。学びの会の研修テーマについては特別の教科道徳が導入された当初は、教科の特性に関する共通理解を図ることや授業の基本的な構成、一般的なモデル授業の提案などがテーマとして設定されてきた。2023 年度は、従来の教員研修に加えて、学部学生に対する効果的な教育実践の紹介という目的を加え、学びの会を実施した。そのため、65 名の参加者のうち、35 名が学部学生という参加者の構成であった。以下、2023 年度に得られた結果と過去に得られた結果を比較することで、今年度の効果について考察する。

まず、学びの会に対する全体的な満足度については、従来の高い満足度を追認する結果が得られた。この結果は、学びの会のテーマや研修内容に対して参加者は高い満足感を得ていることを示している。とりわけ「Q2-4 学びの会の内容は道徳以外の教科の授業づくりに役立つ」「Q2-5 学びの会の内容は幼小中を選ばず役立つ」「Q2-6 学びの会の内容は教育相談や生徒指導にも有効だ」「Q2-7 学びの会の内容は「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに役立つ」といった授業づくりに対する効力感に強い影響を示していることが明らかになった。2023 年 10 月の学びの会では、多様な授業実践者が講師であったため、参加者の授業イメージを多面的に喚起したことが想定される。

本研究では、道徳科の授業に対する学習者関与的授業イメージを促進する要因を検討した。道徳科の授業に対して受講生が抱いているイメージには、道徳科の授業は学習者の主体性が関わると考える学習者関与的イメージと、学習内容と学習者の主体性は独立であると考える学習者分離的イメージがあることがクラスタ分析によって示された。これは、先行研究（沖林ら、2022）を追認するものである。ただし、道徳科の授業イメージに対する参加者の回答を分析すると、先行研究とは完全には一致しない結果が各研究間で得られており、本研究もそのような傾向を示している。本研究では学習者関与的授業イメージと学習者分離的授業イメージの両方が高いクラスタと学習者関与的授業イメージが高く、学習者分離的授業イメージが中位点よりも低いクラスタが得られた。2022 年度の調査では、本研究におけるクラスタ 1 は得られていたが、クラスタ 2 に相当する群は見られず、両方の授業イメージの得点が中位点よりも低い群がみられている。このような回答傾向の違いは、今年度の参加者が 2022 年度の参加者の属性と大きく異なるものであったことによるとも考えられる。2024 年度以降の調査によって追試を試みる必要がある。

回帰分析によって、学習者関与的授業イメージに関連する道徳科の授業イメージの影響を検討した。その結果、Q3-1、Q3-2、Q3-4、Q3-5 がポジティブに影響することが示された。道徳科の授業における、学習者関与的イメージには、児童生徒の価値に関連させること、試行錯誤の活動を含むこと、社会的問題に関連させることが有意に関連していることが示された。

個人的志向性には必ずしもそぐわない場合であっても集団や社会の規範に沿うような行動の心理的プロセスを信念と呼ぶ。そのような、個人と集団や社会の合理性が一貫しないことによって社会的な問題が生じることがある。民族や収入の違いなどによる階層化を理解するために、道徳性に基づく考え方を提唱しているのが、Haidt（2014）による道徳基盤理論である。Graham et al.（2009）はアメリカ人を対象とした調査の結果、支持する政党によって、重視する道徳基盤が異なることが指摘されている。本研究においても、個人の自由な発想を重視する群と個人の自由に加えて教科書など社会的妥当性が保証される教材も重視する群が確認された。今年度の調査結果からも、道徳科の授業イメージについては道徳を教える教員や教えることが予想される学部学生の間でも個人差がみられることが明らかとなった。このことは、授業者の道徳の授業に対するとらえ方自体が授業者によって異なることを指摘するものである。今後は、授業者の道徳観と実際に行われる授業方法などの関係を検討することが求められる。

付記

道徳基盤の特徴に関しては、中村・沖林（2022）に詳述しているので参照していただきたい。

本論文の研究分担は次のように構成されている。第一執筆者は調査項目の設定、調査データの集計分析、論文執筆を行った。第二、第三、第四執筆者は調査環境の設定、会の進行や運営を担当した。

引用文献

Graham、J.、Haidt、J.、& Nosek、B. A. (2009)：「Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations」.『Journal of Personality and Social Psychology』、96 (5)、1029-1046.

Haidt、J. (2014)：『The Righteous Mind Why Good People Are Divided by Politics and Religion』、Brockman Inc.、New York.

中村天音・沖林洋平 (2022):「道徳基盤に対する道徳意識と寛容性と他者受容の関係」、『山口大学教育学部研究論叢』71、41-47.

沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・上川里穂・久保田高嶺・藤永啓吾 (2020):「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』50、11-18.

沖林洋平・松岡敬興・森重孝介・久保田高嶺・藤永啓吾 (2021):「「特別の教科 道徳 学びの会」参加者の意識調査 (2)」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』52、45-52.

沖林洋平・池永真依子・中川穂・藤永啓吾 (2022):「教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』54、35-43.

沖林洋平・池永真依子・中川穂・藤永啓吾 (2023):「教員は道徳科の授業にどのようなイメージをもっているか (2)」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』56、53-62.